

カナダへの香港人移民

谷 垣 真理子

はじめに

10年一昔と言うが、1980年代に香港返還問題が浮上すると、香港から海外への移民が急増した。しかし、香港返還を経過すると、香港からの海外への移民は減少した。その一方、返還後12年を経て、かつての英領植民地・香港は中国内地との経済連携をつよめている。

「中国の一都市」となった香港では、2005年以降、しばしば、中国のほかの都市と比較して競争優位を持ちうるか否かが議論されている。おそらくその答えのひとつは香港の国際性であろう。返還後の香港では母語教育が推進されたが、依然として4分の1の中学では「例外的に」英語教育が行われる。日本の大企業は中国ビジネス本部を北京や上海に移しているが、香港にはまだ多くの多国籍企業が地域営業本部や連絡事務所を設置している。このような状況のなかで、返還後の香港は中国内地でありながら国際的な経験を積める場所として評価され、「身近な留学先」として香港を選ぶ中国内地出身の学生は多い。

こうした香港の国際性は、香港が中国と外部世界を結ぶ結節点であることが大いに影響しているように思われる。香港はその誕生以来、香港を起点にして人が海外に移動し、それにともなってモノ・金・情報が行きかった。香港から海外への移民のうち、返還前、多くの人々が向かったのはカナダとオーストラリアであった。本稿ではこのうち、事例としてカナダをとりあげる。

筆者は1998年と1999年にトロントとバンクーバー、2009年にバンクーバーを訪問し、香港人移民の聞き取り調査をした。また、2009年調査時には広東の関

元昌氏一族のリユニオン活動に参加した。本稿ではまず、戦後の北米への香港人移民の動態を整理し、カナダで香港人移民の足跡を確認する。そのうえで、これらの現地調査から返還後の香港人移民の動態を整理する。

なお、「香港人」という用語は、英領植民地期を通じて使われたものではない。筆者は「香港人」は戦後期になってあらわれた。冷戦構造が中国にも波及していくと、香港と中国大陸との間の交流は制限され、香港では工業化とともに香港大の社会統合が進んだ。これを背景にして、香港生まれの戦後世代にとって、香港は「仮の宿」ではなく「自身の家」となっていった。さらに、1970年代末からの香港返還問題が浮上し、同時に中国の改革・開放政策によって中国大陸との接触が増大すると、香港の人々全体に中国大陸の中国公民とは異なる「香港人」という意識が共有されていった。

1. 返還前の香港からカナダへの移民

(1) 戦前期の移民

香港を起点にした海外ネットワークは、近代史における中国系人の移動の歴史とはりつくように形成されてきた。公式的には、1842年の南京条約で諸外国は中国との間で対等な通商関係を結ぶことができるようになった。その後、1860年の北京条約以降、中国は伝統的な王朝体制から国民国家体制へと変容を迫られた。北京条約は同時に中国人の海外渡航が、中国人の大量出国が始まった。当時、世界では労働力需要が高まっていた。1849年にアメリカのカリフォルニア州で、1851年にオーストラリアで金鉱が発見された。東南アジアではゴム栽培や錫鉱山の開発が進んだ。一方、アフリカからの奴隷輸入による植民地経営には18世紀末から廃止世論が広がり、奴隷制は1833年にイギリス、48年にフランス、65年にはアメリカで廃止されていた。

このような状況下、1850年代より中国大陸から北米に大量の移民が渡るよう

になった。この時期、海を渡った移民の多くは労働者であった（斯波1995：125-128）。アメリカでは1880年以前、移民した中国系移民のほとんどはカリフォルニアをはじめとする西海岸に居住した（Wong 1994：235-237, ウォン：360）。彼らは金鉱山の開発や、大陸横断鉄道の建設に従事した。カナダでも同様であった。この時期の移民はブリティッシュ・コロンビア州のフレーザー河やカリブー山脈で発見された金にひきつけられた。1871年、ブリティッシュ・コロンビア州はカナダ連邦政府に加入することに同意したが、その条件の1つがカナダ西部への鉄道の敷設であった。1880年から84年までの間、難所の鉄道敷設のため、中国人労働者1万7000人が投入された。しかし、鉄道建設事業が完成すると、カナダに残った中国人に対して、移民排斥の動きが起きた（伍 1998：234-235）。1885年、連邦政府は中国人に対して、50カナダドルの人頭税を賦課した。その後、人頭税は1900年に100カナダドル、1903年に500カナダドルに引き上げられた。さらに、1923年には中国人移民排斥法が成立し、商人や外交官、留学生や特別な事例をのぞけば、カナダへの中国人の移民は厳しく制限された。排斥法の成立後、カナダへの入国を許可された中国人はわずかに20数名であった（伍 1998：235）。

この間、カナダの人口センサスによれば、華人人口は1881年が4383人、1891年が9129人、1901年が1万7312人、1911年が2万7831人、1921年が3万9587人、1931年が4万6519人、1941年が3万4627人であった（伍 1998：235）。1920年代に入ると、ほぼ4万人がカナダに居住し、総人口の0.45%を占めたことになる。人口分布は圧倒的に西部のブリティッシュ・コロンビア州に集住しており、1901年が86.0%、1911年が70.5%、排斥法成立前の1921年が59.4%であった。（伍 1998：236）。最初にチャイナタウンが建設されたのはビクトリアであり、その後、バンクーバーにチャイナタウンが建設された。鉄道建設が終了すると、人々は仕事を求めて西部から東部に移動し、バンクーバーからトロント、モントリオールまでの間にカルガリーやエドモントン、ウィニペグなど

にもチャイナタウンが誕生した。

また、カナダに渡った中国人は、また、この時期の移民は北米では広東省の珠江デルタの四邑（新会・台山・開平・恩平）出身者が多く、もっとも多かったのは台山出身者であった。そのほか、三邑（南海・番禺・順徳）やマカオ近隣の中山県の出身者が多かった（伍 1998：235）。中国人の就労に際してはさまざまな制限があり、洗濯業や鮭の加工業など労働条件が厳しく、カナダ市民の多くが敬遠した職種に就労していった。

戦前期、香港は中国大陸最後の港にすぎなかった。英領植民地であったものの、中国大陸と香港との間の中国人の自由往来は確保されていた。英領植民地・香港はその誕生以来、香港の街を建設し、物資を運んできたのは近隣地域から流入した華人であった。香港と中国との紐帯はつよく維持され、香港は中国大陸から若年男性労働力を吸収した。1860年代以降、太平天国の乱を逃れ、香港に家族ごと移住する広州の裕福な商人がようやくみられるようになり、1865年には伍廷芳が華人ではじめて立法評議会議員に任命された。香港ではキリスト教に入信し、英語教育を通して、西洋の知識を吸収した一群も出現した。しかし、香港の華人は「故郷に錦を飾る」ための出稼ぎ者的性格がつよかったと言われる。

(2) 戦後期の移民

1943年にアメリカで廃止されたのに続き、1947年、カナダでも中国人移民排斥法は廃止された。しかし、カナダに入国できたのは、戦前すでにカナダ国籍を有していた中国系の人々の配偶者や18歳未満の子女であった。カナダと中国は1970年まで国交関係を有していなかったため、いったん香港に出境して香港のカナダ総領事館で手続きせねばならなかった。1960年代、カナダの移民受け入れは大きく変化した。1962年の移民法改正で人種差別の撤廃と技術移民の導入が定められ、67年にはポイント・システムの導入が図られた。これによっ

て、カナダの人口および労働力需要の変化からみて、それに応じた学歴や職歴をもった移民を選抜するための方法であった（Smart 1994：98-99，スマート 1998：148-149）。人種や出身地による差別はなくなり、アジア系移民がカナダに定住しうる環境が整った。実際、カナダの人口センサスによれば、華人人口は1941年が3万4627人だったのが、1951年が3万2528人、1961年が5万8197人、1971年には11万8815人、1981年には28万9245人、1991年には58万6645人となり、カナダの総人口の2.17%を占めるようになった（伍 1998：235）。

戦後、香港社会もまた変化した。1949年に中国大陸に中華人民共和国が成立したことが、変化のきっかけであった。1950年の朝鮮戦争の際、中国は義勇軍を派遣し、その後、冷戦構造のなかで、中国は国際的孤立を経験した。対中禁輸措置とアメリカ市場からの中国産品締め出しにより、対中国中継貿易港としての香港の根幹的機能が損なわれた。

戦前よりも多くの人口を抱えた香港では、1950年代に早くも工業化が始まった。工業化社会では教育を受けた良質な労働力を必要とするが、香港でも学校教育が急速に普及した。小学校までは主に中国語（実際には広東語〔中国語の方言〕）が授業言語であったが、中等教育以上は英語教育と中国語教育に分かれ、保護者は子女が経済的上昇を実現するために、英語教育を好んだ。一方、日常生活において広東語は香港住民の共通語となっていた。戦後の香港には広東系以外に、潮州系・客家系・上海系などの各種方言グループが存在したが、工業化の過程で、異なる方言グループ間での接触が始まり、広東語に立脚した香港大衆文化が形成されていった。1967年には地元テレビ局が開局し、香港映画は台湾や東南アジア各地に輸出された。

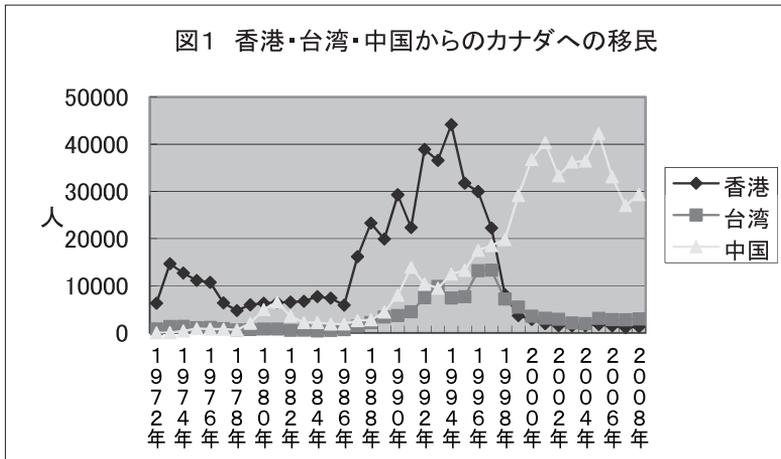
さらに、中華人民共和国の成立前後までに香港に流入した人々にとって、香港は必ずしも最終目的地ではなかった。中英の力関係は逆転し、香港は中国がいつでも回収できる状況となった。「いつでも回収できる」状態であったので、逆に、香港がいつ中国に回収されるのか、戦後期、香港の将来にはつねに政治

的不透明性が指摘された。このような状況のもとで、人々は自身と子女により安定した将来を用意するため移民を選択した。

このような状況のもとで、戦後、香港は移民の出発港から、移民の送出元へと変化していった。これは、第二次世界大戦後、香港もまた移民の懐かしむ「故郷」へと変化したことを意味する。第二次世界大戦終了後から新中国成立までの間、香港は中国大陸からの移民でふくれあがり、その後の工業化の過程で香港大の社会統合が進んだ。たとえば、広東語は香港の共通語となり、香港で生まれ、教育を受けた人々にとって、香港はまぎれもなく「自身の家」であった。また、短い時間であっても、避難先の香港で親戚同士が出会い、その後も親戚の一部が香港に居住しつづけた場合、香港は一族のネットワークの結節点となった。

(3) 香港からの移民の3つの波

カナダの移民政策の変化と、香港内部の事情を考えると、戦後期、カナダへの移民は3つの波があったと考えられる。(図1参照)



(出典) 1972年から1996年の数字はカナダ政府発表の*Immigration Statistics* (1972年版か

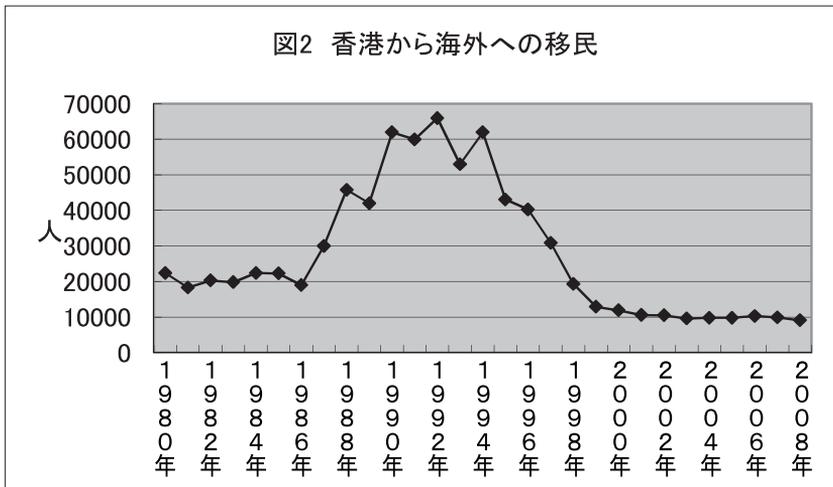
ら76年版まではManpower and Immigration Canadaが発行、1977年版から1996年版まではEmployment and Immigration Canadaが発行)、その後の数字はCitizenship and Immigration Canadaの*Facts and Figures: Immigration Overviews* 2005年版から2008年版による。

第1の波は1949年の新中国の成立である。国共内戦時にいったん香港に避難した人々のなかで、新中国が成立すると共産党政権下での生活を嫌って海外移民が選択された。移民が向かったのは、華僑・華人が集住した東南アジアではなく北米であった。すでに述べたように、カナダでは1947年に中国人移民排斥法が廃止された。アメリカでも1943年に中国人排斥法が廃止され、毎年105人の移民枠を認める割り当て法案が可決されていた。さらに、1952年にアジア人排斥法として知られる1924年移民法が撤廃された。1953年には56年末を期限にして国共内戦による中国人難民3000名の米国入国が許可された(容2009: 92)。

第2の波は1960年代半ば以降であった。香港からカナダへの移民が実際に増加していくのは、1960年代半ば以降である。1972年の*Immigration Statistics*から、香港は移民の送出元として統計にあらわれた。カナダの移民政策で1967年にポイント・システムが採用されたことが、移民のプル要因であろう。一方、この時期の香港側の要因は、1967年の香港暴動であろう。香港社会は1960年代に年率二桁台の経済成長を達成したが、貧富の格差は大きく、厳しい労働条件と低賃金に社会不満は鬱積していた。香港暴動は造花工場の労働争議が契機であり、香港の親中国派勢力は闘争委員会を組織し、「香港解放」が現実のものとして認識された。香港の著名な民主派の政治家、李柱銘は67年暴動について「親友は皆、航空券を2枚肌身離さず持ち歩き、情勢が変化したらすぐに妻と出国できるようにしていた」と回想している(陳・梁1986: 34-35)。カナダへの移民数は増加したが、それでもアメリカへの移民の方がやはり多かった。

第3の波は1980年代に到来し、それが1997年の香港返還まで続いた。1984年

の中英共同声明で、中英両国は、香港が1997年7月1日をもって中国に一括返還されることを合意した。香港の将来問題が確定したことで、共産党政権下の生活に不安を覚えた住民が海外への移民を決断した。1980年代初期、移民数は毎年2万人台で推移したが、1987年に3万人、88年に4万5800人と増加した。天安門事件直後の1990年には6万2000人を記録し、天安門事件が住民に与えた衝撃の大きさを認識させた。海外への移民には管理職や専門職の者が多かったため、香港政府はもとより香港財界も人材の流出として海外への移民を問題視した（図2参照）。



（出典）香港政府発行の『香港年報』各年版より。

移民先には英連邦内で香港と教育制度が似通ったカナダやオーストラリアが選ばれた。この時期の移民は、移民先に到着した段階で、これらの人々は英語を解することができた。彼らは戦前に形成されたチャイナタウンを経由することなく、現地での生活に適應した。その一方、この時期の移民は第1の時期や第2の時期と比較すると、送出元とつよい関係を維持した。すでに1970年代か

ら海外旅行は廉価化し、移民の増加とともに香港と海外間の国際電話料金は自由競争のなかで引き下げられた。さらに、1990年代に入ると、インターネットの普及により電子メールで海外と頻繁に連絡がとれるようになった。添付ファイルの形式でさまざまな書類を瞬時に送信できるようになったことが、人々のコミュニケーション文化の形を大きく変えていった。

カナダへの移民数は1987年に急増し、以降、香港はカナダが受け入れる移民の主な供給地域となった。また、香港からの移民先として、カナダはアメリカを追い抜いた。

第3の時期を象徴するのが、「太空人」である。中国語のもともとの意味は「宇宙飛行士」であるが、妻（太太）がいない（空）人という意味がこめられている。戦前の移民とちがいで、戦後期、とりわけ第3の波の時期には人々は家族ぐるみで海外に移民した。しかし、香港からの移民は香港が不景気で失業したので海外に移民したのではなく、香港の将来が政治的に不透明であることをリスクヘッジするため、カナダの失業率が高いことを認識した上で移民を決断した。このため、移民先で相応の仕事がみつからなかった場合、あるいは香港で会社経営を行っていた場合、男性世帯主は妻子をカナダに残したまま単身で香港にもどって経済活動を続行し、香港と家族のいる移民先を飛行機で往復する生活を繰り返した。また、第3の時期の香港人移民は量的にも多く、カナダ西部で香港人移民が多かったカナダのバンクーバーはホンクーバーと呼ばれた。バンクーバーやトロントの郊外には、飲茶のできるレストランや香港風の中華食材の店が開店した。

ただし、返還後、香港からの海外移民は急速に減少した。香港特別行政区政府の発表によれば、1997年に早くも4万人台を割り込み、3万900人となった。1998年以降1万人台を推移し、2003年以降（2006年を除く）は1万人台を割り込んだ。香港返還以後、2000年より中国出身者がカナダへの移民の第1位を占めるようになった。なお、戦後第1の波の時期、香港とともに台湾はカナダへ

の華人移民の供給源であった。

2. 香港人移民がカナダに持ち込んだもの

1999年の調査で印象的であったのは、第2期に到来した戦後の香港人移民が、第3期に到来した香港人移民と自身とを区別していたことであった。香港人移民全体の動態を見ると、第3期の移民の存在のみが目立つ。第3期の移民の波が到来した際に、大量の移民とともに香港の食文化が持ちこまれたことは、すでに紹介されてきた (Johnson and Lary 1994 : 132-133, ジョンソン・ラリー 1997 : 194-195, 森川2003 : 202-206)。1960年代から1980年代までの間に、カナダは英連邦の一員であること以上に、香港人にとってなじみやすい場所へと変化していたように思われる。香港人移民の増加とともに、カナダでは中国文化、さらには香港文化や香港事情を享受できるような「文化的なセーフティーネット」がさまざまに発達し、カナダにおける生活上のアメニティーの向上がはかられた。また、香港から北米への移民の第2の波が訪れた1960年代半ば、香港では香港の領域内で「香港大」の社会統合がすでに進展していた。この結果、香港がひとつの地域として機能するようになっていた。

(1) 中国語で情報をとる

インターネットが普及したとは言え、まだまだ新聞やテレビやラジオの果たす役割は大きい。ニューヨークや香港など、日本人が一定程度居住する地域では、海外赴任先の日本人家庭では、日本語新聞を宅配してもらい、NHK国際放送を視聴し、日本食材を関連スーパーで購入する風景が見られる。2009年の調査時、カナダでは5つの中国語紙が発行されていた。そのうち「星島日報」(Sing Tao Daily)と「明報」(Ming Pao Daily News)の2紙は香港から進出した新聞であった。

星島日報は1978年、トロント地元の Torstar 紙との提携により発行をはじめた (http://en.wikipedia.org/wiki/Sing_Tao_Daily, 2009年10月23日閲覧)。その後、香港返還問題の浮上とともに香港人移民が増加すると、1988年以降、バンクーバーやブリティッシュ・コロンビア州・カルガリー・アルバータでカナダ西部版の発行をはじめた。トロントとバンクーバーでは購読者集住地域で宅配を実施している。ウェブサイトでは過去1週間分の新聞の閲覧ができる。また、週末の土曜日には「星島週刊」(カナダの娯楽・生活情報を中心)、日曜日には「星週刊」(香港の娯楽・時事ニュース情報を中心)が付録としてつく。カナダの星島日報の親新聞は、香港の「星島日報」である。2004年まで星島日報のオーナーであった胡仙は香港特別行政区の董建華・初代行政長官との親交が深かった。東南アジアに勢力を持つ胡文虎一族である胡仙は返還前に中国側の統一戦線工作の対象であった。もともとは台湾寄りの中立系紙であり、その後中国寄りの論調をとったため、香港ローカル色は比較的薄い。

これに対して、明報は第3の移民の波の到来とともに海を渡った。カナダの1993年5月にカナダのトロントでカナダ東部版の刊行を始め、同年10月にバンクーバーでカナダ西部版の発行を始めた (<http://www.mingpaotor.com/html/info/intro/>, 2009年10月23日閲覧)。星島日報と同様に、明報もトロントとバンクーバーの購読者集住地域で宅配を実施している。ニューヨーク版は1997年4月から発行されたが、2000年に「ニューヨーク無料報」が創刊され、2009年2月に「明報ニューヨークフリーペーパー」として再統合された。(http://en.wikipedia.org/wiki/Ming_Pao_Daily, 2009年10月23日閲覧)。ウェブサイトではカナダ東部版と西部版は過去1週間分の閲覧ができ、香港版の明報は2001年からのネット版の閲覧ができる(有料)。また、週末の土曜日には「星期六周刊」(カナダの娯楽・生活情報を中心)、日曜日には「明報周刊」(香港の娯楽情報を中心、時事ニュースは金曜日に別刊行)が付録としてつく。親新聞である香港の「明報」は1978年まで中国寄りの報道で知られたが、その後、中国

に対して客観的な報道姿勢へと転換し、香港では中立紙と位置づけられ、ニュース報道のクォリティの高さが評価されている。

このほか、2009年の調査時点でカナダでは中国語新聞は「世界日報」(World Journal)、「現代日報 (Today Daily News)」, 「大紀元」(The Epoch Times) の3紙が発行されていた。

このうち、もっとも歴史が古いのが、世界日報 (World Journal) である。世界日報は第2の移民の波の到来後、1976年に設立された (<http://www.worldjournal.com/>, 2009年10月23日閲覧)。発行都市はアメリカのアトランタ・シカゴ・ボストン・ロサンジェルス・ニューヨーク・サンフランシスコ・ヒューストン・ワシントンDC, カナダのトロントとバンクーバーにのぼり、チャイナタウンとその郊外の中国語話者集住地域で販売されている。また、北米では郵送による購読が可能である。台湾の連合報が所有しており、1990年代まで中華人民共和国との対決姿勢が鮮明であった (http://en.wikipedia.org/wiki/World_Journal, 2009年10月23日閲覧) が、その後論調は中立的になってきたと言われる。その要因は、(1)1980年代以降急増した中国大陸からの移民を読者層にとりこもうとしたこと、(2)1989年の天安門事件以後、中国の民主化運動を支持したこと、さらに(3)親会社が連合報であるので親国民党寄りの陣営に属するため、台湾独立を掲げる民進党陣営とは一線を画するため、相対的に中国に対して中立的な報道に変化していったこと、があげられる。

現代日報は2005年11月の発刊であり、よりセンセーショナルな紙面づくりで、ウェブ版で過去1週間の紙面が見られる (<http://www.todaydailynews.com/#>, [http://en.wikipedia.org/wiki/Today_Daily_News_\(Toronto\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Today_Daily_News_(Toronto)), 2009年10月23日閲覧)。付録として土曜日に「現代北京青年週刊」(北京の生活・娯楽情報が中心、簡体字で出版)、日曜日に「701」(香港の「東方新地」を再編集)がついてくる。

大紀元は法輪功によって発行された新聞であり、英語版は2000年に発行が始

まった (http://en.wikipedia.org/wiki/The_Epoch_Times, 2009年10月23日閲覧)。

このほか、中国語メディアではThomas Fungのフェアチャイルド集団 (Fairchild Group: 新時代集団) が放送部門で一大勢力を誇る (http://en.wikipedia.org/wiki/Fairchild_Group, <http://www.fairchildgroup.com/index.php>, 2009年10月23日閲覧)。傘下にはテレビ部門とラジオ部門を持ち、広東語放送を主力に置きつつ、中国語標準語放送まで業務を拡大している。テレビ部門ではフェアチャイルドテレビ (Fairchild TV) 系列は広東語放送が主であり、Fairchild TV Calgary と Fairchild TV Vancouver は広東語放送、Fairchild TV Calgary は広東語・中国語標準語放送である (<http://www.am1470.com/en/history.php>, 2009年10月23日閲覧)。これに対して、Talentvision (城市電視) はカナダでははじめての中国語標準語テレビネットワークである (<http://www.fairchildgroup.com/ttv.php>, 2009年10月23日閲覧)。

一方、ラジオ部門ではフェアチャイルドラジオ (Fairchild Radio: 加拿大中文電台) をおさめる (<http://www.am1470.com/about.php>, 2009年10月23日閲覧)。たとえば、ラジオのニュース番組では広東語ニュースが5名のスタッフであるのに対して、中国語標準語ニュースのスタッフは2名である (<http://www.am1470.com/news.php>, 2009年10月23日閲覧)。またニュース評論家15人のうち、劉銳紹と呂大樂、洪清田、吳志森、陶傑は香港でも著名であった。

フェアチャイルド集団は Cathay International Television と Chinavision Canada から放送ライセンスを譲り受けたのが、放送業進出のきっかけとなった。Cathay International は1980年代、バンクーバーで地方局として発足し、1987年に Chinavision に買収された (http://en.wikipedia.org/wiki/Cathay_International_Television, 2009年10月23日閲覧)。Chinavision は Francis Cheng が1984年に開設したケーブル放送であり、番組の9割が広東語、1割が中国語標準語であった (http://en.wikipedia.org/wiki/Chinavision_Canada, 2009年10

月23日閲覧)。

このほか、ラジオ部門では早くも1973年にバンクーバー在住の James Ho (賀鳴) が Overseas Chinese Voice (華僑之声) を開局していた (http://www.am1320.com/eng_aboutus.html, http://www.am1320.com/chi_aboutus.html, 2009年10月23日閲覧)。同局は1993年に多文化AM局に改組され、Mainstream Broadcasting Corporation (匯声廣播傳媒集團) 内のAM1320のCHMBとして放送を続けている。番組構成表によれば、広東語が8割、中国語標準語放送が1割弱、そのほかの言語(ギリシア語、タガログ語、ウクライナ語、ポルトガル語、ベトナム語、日本語など)による多言語プログラムが7%程度を占める(http://am1320.com/schedule/prog_ch.htm, 2009年10月23日閲覧)。

(2) 中国語で交流する

トロントとバンクーバーには、それぞれ中華文化センター (Chinese Cultural Centre) がある。これらはチャイナタウンの伝統的な互助組織である中華会館 (Chinese Benevolent Association) とは一線を画する。中華会館は国民党の政治的影響下にあったが、中華文化センターは第2の波とともにカナダに移民してきた人々が、カナダ社会に対して自身の文化をつよくアピールしたものであった (Johnson and Lary 1994 : 127-128, ジョンソン・ラリー 1997 : 187-188)。

トロントの中華文化センターはScarborough Community Complexの一部であり、文化活動のほかにAsian Business Cultural Development Centreを併設している ([http://www.ccccg.org/F.cgi/\(en\)/abtccc.html](http://www.ccccg.org/F.cgi/(en)/abtccc.html), 2009年10月10日閲覧)。スカボローは中国人集住地域である。その設立の目的は中国系市民が自身の文化遺産を享受すること、異なる文化背景を持つ他の市民と中国文化を共有すること、中国系市民と他の文化背景を持つ市民との相互理解を促進することであった ([http://www.ccccg.org/F.cgi/\(en\)/culture.html](http://www.ccccg.org/F.cgi/(en)/culture.html), 2009年10月10日閲覧)。さらに活動の柱の第一にあげられたのが、カナダのメインストリーム

の人々に中国文化への理解をもってもらうことであった。具体的な活動の第一にあげられたのが、Canadian Opera Companyに西洋と中国のオペラ双方への理解を深めてもらうことであった。このほか、中国系市民の年中行事である中秋節や旧正月が紹介され、中国系市民という異なる文化背景を持った人々をいかにカナダ社会に融合してもらうかに力点が置かれた。

バンクーバーの中華文化センターも、その設立趣旨はやはり、中国系市民と他の市民との相互理解を進めることであった。トロントの中華文化センターがScarborough Community Complexの一部であったが、バンクーバーの中華文化センターは由来からのチャイナタウンの中心に置かれた。設立のきっかけとなったのは1972年の秋である (http://www.ccccvan.com/about_us_en.html, 2009年10月10日閲覧)。3つのレベルの政府代表からチャイナタウンにコミュニティセンターを建設することが提起され、1973年に実現した。1974年4月には非営利団体として、省政府と連邦政府双方に登録した。さらに、1980年には行政事務と教育活動を行う建物が完成し、1981年には商業センターとして貸し出し可能な建物が完成した。1986年には多目的ホールとしてDavid Lamホールや孫文中国庭園が完成した。郊外に第2のチャイナタウンが形成されたことに伴い、1991年にはリッチモンド (Richmond) に中華文化センター支部が完成した。バンクーバー中華文化センターには「新しくカナダに到着した移民がカナダでの生活に適應するように手助けする」ことが、活動の柱に含まれているが、トロントの中華文化センターにはその項目は含まれていない。

両者のウェブサイトと比較すると、トロントよりもバンクーバーの中華文化センターの方が、中華文化の普及活動をより積極的に推進している印象を与える。バンクーバーの中華文化センターには付属の中国語学校が1981年に開設された (http://www.ccccvan.com/education_en.html, 2009年10月10日閲覧)。年間300ほどのクラスが運営され、そこで学ぶ学生は4000人にのぼる。また、チャイナタウンとリッチモンド双方では、中国語コースを含めたさまざまな文

化コースが提供された。

(3) 中国文化に囲まれて老いを迎える

こうした「セーフティネット」のなかできわめて先進的なのが、頤康老人ケアセンター (Yee Hong Centre for Geriatric Care, 以後「頤康」と略す) である。頤康の前身は、拡大トロント中国人コミュニティー老人ホーム (The Chinese Community Nursing Home for Greater Toronto) である。中心人物はトロントの開業医、ジョセフ・ウォン (Joseph Wong [王裕佳]) である (http://en.wikipedia.org/wiki/Joseph_Yu_Kai_Wong, 2009年10月9日閲覧)。ウォンは香港からマクギル大学 (McGill University) に留学した。当初、同大学で医学を学ぼうとしたが、外国人学生には医学部履修は制限されていたため、電気工学を学び、その後ニューヨークで医学を学び、再度カナダにもどった。カナダに留学中、ウォンは W5 事件に遭遇する。1979年、カナダの公共放送であるCTVが、中国人留学生がカナダ市民から大学での勉学の機会を奪っているという番組を放送した (http://en.wikipedia.org/wiki/History_of_Chinese_immigration_to_Canada, 2009年10月9日閲覧、この資料が一番説明が詳しかった)。番組では外国人学生が当時カナダに10万人いることを強調し、ある女子学生は好成績であったにもかかわらず、トロント大学の薬学部に進学できないことを嘆いた。彼女の不満を補強するため、「中国人」であふれている教室の様子が全国に放映された。しかし、当時、カナダで就学する外国人学生は5万5000人しかおらず、全日制の大学に在学する外国人学生は2万人であった。しかも、当時のトロント大学の薬学部には外国人学生は1人も在籍していなかった。このため、W5はカナダ国籍を持っている中国系カナダ市民をすべて「迷惑な外国人」と扱っていたとして、カナダの中国人コミュニティーでは抗議活動が起きた。これが契機となって「カナダ華人協進会」(Chinese Canadian National Council) が結成された。ウォンは W5 反対運動で積極的に

運動家として活動した。

ウォンはアメリカで医学をおさめてカナダにもどったが、そこで痛感したのは、医療の現場で中国人コミュニティの年長者がカナダのメイン・ストリームの医療施設で意思疎通に困難を覚え、行き届いたケアを受けていないことであった (<http://www.yeehong.com/centre/story.phph>, 2009年10月9日閲覧)。この現実を改善するため、ウォンは中国系カナダ市民の友人30名とともに、自身の両親や祖父母が人生の最後の場面で尊厳を持って手厚いケアを受けられるよう、老人ホームの建設を始めた。1990年には頤康基金会 (Yee Hong Community Wellness Foundation) が発足し、老人ホームの建設に向けての資金集めを担当した。1994年10月に頤康老人ケアセンターは正式に開幕した。96年6月にはカナダの健康サービス評価委員会から認証を受けた。同年11月にはさらに65床増床と日帰りのデイケア用の施設の拡充が企画された。その後も頤康は優秀施設として認証を受け、1999年からはスカボローからの拡張を始めた。マーカム (Markham) とミシソーガ (Mississauga) では200床、スカボロー・フィンチ (Scarborough Finch centre) では250床を持つ新しい頤康が建設された。3施設はすべてアルツハイマー症専用施設があり、中国人コミュニティだけでなく、南アジア系やフィリピン系、日系など異なる文化背景を持つ人々をも受け入れ始めた。

筆者は1998年に拡張最中の頤康を訪問した⁽¹⁾。老人ケアセンターでは、職員はバイリンガルで英語と中国語 (広東語が多い) で入居者に話しかけていた。食事はフロアーのホワイトボードには各人の状況に合わせて、毎食の内容が細かに書き記されていた。食事では基本的に米食に中華料理であり、パン食を嫌う老年の人々の生活のアメニティーを高めていた。入居者には広東オペラのクラスや中国式水彩画のクラスが開講されていた。人生の最後でカナダのメインストリーム文化を要求されることが、中国系市民にとってそれまでどのように苦痛であったか、ケアの内容からうかがえた。

3. 香港返還後の変化

中国大陸からの移民の急増は、カナダにおける中国語メディアの動向によくあらわれている。それまで香港から進出した星島日報と明報の二大紙が独占していた読者層に変化が生まれつつある。星島日報が公表したカナダの中国語紙の購読調査で、トロントでもバンクーバーでも新移民の多いダウンタウンでは、香港系の二紙よりも国民党系で歴史の長い世界日報が他の地区よりも購読者層のシェアをのばしている (<http://news.singtao.ca/vancouver/2007survey.pdf>, 2009年10月23日閲覧)。明報はニュース報道のクオリティの高さを評価されているが、香港人集住地域でその強さを発揮している。とりわけ、40歳以上の年齢層での支持が高い。

北米生まれの第2世代は中国語を話すことはできても、漢字を読むことのできない者は多い。したがって、新聞の購読層はカナダ在住の中国系市民全体の動向ではなく、新規移民の動向により多く影響されることとなる。このため、新規移民の供給源が香港から中国大陸へと変化することによって、購読者の構成は変化する。中国大陸からの移民に新たな購読者層を開拓するため、中国大陸報道を充実させることは必要である。2005年に創刊された「現代日報」の週末の折り込み雑誌が、香港に中心を置くものと中国大陸に中心を置くものに分かれているのは、カナダの中国系社会の変化を物語っている。

話しことばの世界である放送部門でも変化が見られる。Fairchild Group の動向に象徴的なように、カナダの中国語放送はは従来広東語が中心であったが、2000年に入ると、カナダで初めての中国語標準語テレビ放送となるTalentvisionが誕生した。

このような環境のなかでカナダへの香港人移民にはどのような変化が生まれたのか、筆者がたずねたバンクーバーの香港人家族の例から考えてみよう。

[ひとりの「老香港」]

A氏はバンクーバー近郊のSurryの瀟洒な戸建に、夫人と4人のこどもと住む。バンクーバーまでは高速で1時間ほどの道のりである。A氏がカナダに移民したのは、香港で大学入試に失敗した翌年であり、1970年代の終わりであった。A氏は自らを「老香港」と呼ぶ。A氏は男の子ばかりの5人兄弟の末っ子にあたる。A氏がカナダに移民したきっかけは、長兄がカナダに移民したことにはじまる。長兄もまた親しい友人がカナダに偶然移民したのがそのきっかけであった。長兄にとってカナダは「チャンスの大地」であった。

A氏の母親は、当時香港からの「脱出」を希望していた。母は中国共産党政権下の香港での生活は断固として拒否し、香港にいる息子の誰かが自分をカナダに連れて行くように希望した。

母の「香港脱出」の希望は、中国との苦い「遭遇」に起因する。

A氏の父母はベトナム華僑であった。父は中国大陸から移民した第1世代に当たり、母はベトナム居住が複数代目にあたっていた。父は実業家として成功し、米販売業のほか漢方薬材店、金融業、映画館をサイゴンで営んだ。A氏の回想では、サイゴンの自宅には戦前すでに冷蔵庫があり、父が敷地内で自動車に乗っていたという。相当の資産家であったA氏の父は、1949年に中華人民共和国が成立すると、強大な国家に祖国が生まれかわったことを心から喜び、帰国することを決心した。A氏の父は所有した店をすべてたたみ、店のスタッフには十分な退職金を配り、一家あげて中国に帰国した。しかし、帰国後、わずか数年で一家は中国から香港に出国したという。そのときA氏の父の所持金はわずか5香港ドルであったという。苦境の一家に援助の手をさしのべたのは、ベトナム時代の使用人であった。使用人は退職金を元手にして、香港で映画館を経営していた。A氏の父はそこで会計の仕事をするようになった。かつての使用人のために働くという環境の変化のなかで、A氏の父は病に倒れ、数年の

闘病を経て逝去したという。

こうした状況下、折悪しく香港大学の入試に失敗したA氏が、母をカナダに連れていくことになった。A氏にとってカナダは新たなチャンスにめぐりあった場所であった。A氏は理工学院に通って会計学を勉強し、卒業後は公務員として勤務（就職直前にカナダ国籍を取得）した。A氏は夫人と理工学院で出会った。夫人は高校生の時にカナダに移住し、A氏より一足早くカナダでの生活を始めていた。夫人は結婚後もアパレル会社で勤務したが、カナダの景気後退により突然解雇された。そのため、会社時の経験を活かしてセレクトショップを開いて2児を育てた。3番目の子どもを身ごもった際、A氏と相談して自分の店を閉めて、以後、自宅で会計事務の事務所を開いた。

[[「老香港」と「新香港」]]

A氏は1999年の調査時から、カナダの香港人コミュニティーには「老香港 (oldcomers)」と「新香港 (newcomers)」がいることを強調した。「老香港」は返還問題の浮上前から香港に移住した人々であり、「新香港」は返還問題の浮上後、香港に移住した人々である。A氏は、「老香港」はカナダで新たな人生を切り開いた傾向があり、すでにその子女はカナダ生まれの場合が多く、カナダの生活への定着度が高いという。子女の多くは「カナダ人」としての意識がよくなり、市内のチャイナタウンはむろんのこと、香港からの移民が多く住むリッチモンドまで足を運ぶことも少ないという。子女の結婚相手も、中国系ではない場合を想定せねばならないという。

一方、「新香港」には、移民した際にカナダでの定職が決まっていなかったケースが多かったという。A氏のふたりの兄のうち、三兄は教会の牧師で、香港の教会からバンクーバーの教会へとポストを紹介されたが、次兄はカナダで就職活動することになった。次兄は香港では管理職として働いていたが、カナダでは工場一般労働者として勤務した。

A氏によれば、「新香港」の家庭では、「老香港」ほど移民を肯定的には評価していない傾向があるという。自身の職業のランクダウンに加えて、返還後の香港の情勢が予想したほどひどくはなかったため、その子女にとってカナダ行きがプラスであったかどうかを逡巡することがあるという。A氏のふたりの兄のこどもはいずれも大学に進学したが、次兄のこどものひとはカナダで大学を卒業した後、香港にもどって就職した。ただし、次兄は全体としてはカナダでの生活を肯定的に考えているという。香港では決して望むべくもなかった戸建を獲得し、格段に良い住環境のなかで暮らしていることが、カナダ生活の何よりのメリットであるという。

就職活動が順調であった三兄にとっても、最大の心配事は娘2人の将来であった。三兄の娘は小学生のときに、カナダに移住したため、言語の習得でハンディーをかかえた。三兄は父親として娘が中国人でもなく、カナダ人にもなりきれない中途半端な人間に育つことを恐れ、両親ともに娘の教育には力を注いだ。また、カナダ在住の3人の兄弟のうち、香港との交流がもっとも濃密であったのは、三兄の家庭であったようである。三兄は2005年から2年の契約でいったん、香港の別の教会に奉職し、珠江デルタの外資系企業で働く労働者の地位改善活動を行った。この間、夫人は香港の大学でソーシャルワークについて教鞭をとった。香港滞在中、三兄は、香港生まれの娘2人を連れて、中国大陸を訪問し、カナダの生活がいかに安定したものであるかを実感させた。

[中国との遭遇]

A氏家族とは1999年以来、10年ぶりの再会になった。A氏は「カナダは穏やかな世界でたいした変化はない」というが、自宅を訪問すると、この10年間でA氏が「中国と遭遇する」機会が増えたように思われる。

A氏はこの10年の間に、定期的に中国を訪問するようになっていた。A氏はカナダで中国大陸からの移民と知り合い、彼が中国に投資する際の相談に乗る

ようになっていた。友人はカナダ製品のクオリティを高く評価し、カナダ製品を中国に直輸出するビジネスを始めた。最初の試みは失敗したが、2度目のプロジェクトには成功し、カナダから直輸入した住宅を建設して販売した。その後、バンクーバー水族館にヒントを得て、水族館をテーマパークとして建設するプロジェクトを始めたという。カナダの事情を助言するA氏は最近数年間、上海を年2回ほど訪問しているという。こうした出張の成果は、以前はピアノだけが置かれていた客間に、中国各地の記念品を飾るための飾り棚がしつらえてあった。

さらにA氏は中国語標準語をかなり頻繁に使うようになっていた。10年前、筆者が広東語につまると、A氏は英語で補ったが、今回はまず中国語標準語で説明してくれるようになった。また、A氏と「中国との遭遇」は2年前から習い始めた二胡にもあらわれている。二胡はバンクーバーやリッチモンドの中国文化センターまで習いに行くのではなく、Surreyに居住する中国からの移民に師事していた。A氏の4人のこどもはすべてがピアノを習い、長女と次女はピアノ教師として自活できるだけの技能を身につけていたが、三女はピアノのほか中国の古箏も演奏できる。

A氏宅では中国語新聞を購読していないが、自身の二胡のレッスンにあらわれているように、A氏はSurreyで近隣の中国大陸出身者とも日常的な交際を行っている。同時に、バンクーバー在住の他の兄弟と1ヶ月に1回、家族ぐるみで食事をともにしている。こうした日常的な交流が、A氏が中国投資の相談にのりうるような知見の基盤となっているのであろう。

4. 香港発のディアスポラ家族

A氏は自身が移民の第1世代にあたるが、本節の事例は、A氏の将来の姿とも言える一族である。この一族は1949年前後に移民した者が多く、居住地はカ

ナダよりもアメリカが多い。第1の時期、カナダはまだ移民に門戸を開いていなかった。

筆者は2009年、アラスカで行われた関元昌一族のリユニオン活動に参加した。リユニオンは英語の reunion である。「宗親会」(同姓組織)のすべてもしくは一部によるネットワーク再強化の活動である。華僑華人は、外国ではまず家族の血縁関係に頼り、さらに出身地を同じくする同郷会や職業による行縁に頼って、ネットワークを築くと言われる。しかし、リユニオン活動では自然発生的なものではない。2009年のアラスカリユニオンを参与観察して、リユニオン活動は一族がリユニオンを実行しようという意思を持ち、準備活動を通じて始めて実現したものであるということを実感した。

関元昌は1823年に広東省番禺で生まれ、清末の時代に西洋的歯科医の先駆けとなった。父・関日はプロテスタントによる中国布教で著名なロバート・モリソン(馬禮遜: Robert Morrison)の初期の弟子であったと言われる(容2009: 87)。父がキリスト教に入信したため、関元昌の一家はアヘン戦争後香港に移住した。香港で関元昌は教会の布教書物の印刷工を務め、その後、アメリカ人医師から歯科を習った。関元昌は、妻の黎氏との間に10男5女を授かった。15人のこどものうち、夭折した者、生涯結婚しなかった者、結婚したが子どもを授からなかった者をのぞけば、第2世代の10人のこどもの子孫が代を重ねている。2003年に一族がはじめてリユニオンを行った際、一族は第1世代と第2世代の物故者を含めて、1,060人に達していた。

[リユニオン活動の開始まで]

リユニオンの準備は、まず、参加者に連絡することから始まる。

関元昌一族は第1世代の関元昌と黎氏は広州と香港で過したが、第2世代は広東から福建省、江蘇省、上海、天津や北京、さらにはマラヤに活躍の場を広げた。(容2009: 91)。キリスト教家族と言える関氏一族は、キリスト教に否

定的な共産党よりも国民党政権に近い政治的立場をとったので、1949年前後に、一族はその多くが中国大陸を離れ、香港や台湾、さらには北米に向った。この結果、第3世代は米国、カナダ、英国、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポール、マレーシア、タイと全世界に散らばった。いったん外国に散らばった親戚同士で住所を確認することも容易な作業ではなかった。

1949年の段階では、海外移民するということは移民先に定住することを意味し、故郷への帰省は数えるほどしかできなかった実際、1950年代や60年代に、海外にいる関氏一族と香港に残った家族との間でそれほどの交流はなかった（容2009：92）「50代はこどもの大学進学と家のローンに追われ、30代と40代は結婚と就職、育児という人生の一大事業に直面し、20代は移民した社会に溶け込むこと」にそれぞれ精一杯であった（容2009：92）しかし、1970年代に入ると、航空機が大型化し、海外旅行の費用が低廉化した。さらに、1990年代に入ると、インターネットの普及により、世界に散らばった一族が連絡を取ることが従来よりも格段に容易になった。この時期、第4世代の多くは定年退職を迎え、Eメールで連絡をとりあう時間的な余裕が生まれてきたという（容2009：）。

なかでも、シンガポールのB氏はリユニオン活動の基礎となるさまざまな準備を行なった。1999年8月に米国コネティカット州で、中国の清末の留学生の父と呼ばれた容閔についてのワークショップが開催された。このワークショップでB氏は容閔一族のとりまとめをした。B氏は容閔の従弟に当る容星橋（容開）の孫にあたる。容星橋は関元昌の三女の夫であった。このため、B氏は容閔一族と関元昌一族の双方に跨る形で、それぞれのリユニオンの準備を進めた。その際に役立ったのが、B氏の日常的な親族との交流であった。B氏は一族がシンガポールを訪問すると食事に招待したという⁽²⁾。シンガポールはオセアニアと東アジアの中間に位置し、香港からヨーロッパに行く際、南回り便の航路でシンガポールはしばしばストップオーバー地点となった。実際、シンガ

ポールは東南アジアの航空網のハブであり、多くの親戚がシンガポールを訪問し、B氏は一族の多くと連絡があった。

こうして、一族のメンバーに時間的な余裕ができ、技術革新により新たなコミュニケーション文化が生まれ、B氏のように一族のリユニオンに熱心な人物がいたことで、関氏一族のリユニオンの準備が具体的に進められた。

[家族コードの設置]

準備作業で画期的であったのはリユニオンの準備期間で「家族コード」が制定されたことである。一族の規模が1,000人以上となると、リユニオン以前は一族と疎遠な者も少なくなく、見知らぬメンバーを認識するため、家族コードが設置された（Yung 2004 : 11）。

中国の伝統的な家族では結婚した息子は父から独立して、それぞれの「房」（Branch）を構成する。しかし、21世紀のリユニオンでは、関元昌一族は中国的な伝統には従わず、男女双方に「房」の構成を認めた。したがって、関元昌の第2世代の10男5女は15の「房」を構成することになる。さらに「房」の番号は、男女で区別することなく、出生した順番どおりに割り振られた。たとえば、長男であっても、3番目のこども（第三子）であれば、「房」内の番号は「3」となった。

2009年現在、すでに第1世代の関元昌夫妻は逝去し、第2世代も存命していない。存命のいちばん古い世代は第3世代であった。家族コードの最初の数字は、第2世代のなかでの生まれた順番を指す。第2世代は関元昌のこどもの世代であるので、1から順番に15まで房に番号が割り振られた。次の数字は第3世代のデータを伝える。第3世代であれば、各房のなかでの出生順にしたがって、番号が割り振られる。以下、同様の順番付けが繰り返される。たとえば、「8」は関元昌の第八子（第2世代）にあたる三女の関月英を意味する。実際のリユニオン活動においては、第2世代の房によるグループ分けがしばしば使

われた。「8-9」は関月英の第九子を意味し、「8-9-3」は関月英の孫にあたり、第九子の3番目の子どもを意味する。さらに、家族コードは配偶者にも与えられた。一族の当該構成員の家族コードの最後に「S」をつけたが、これによって、配偶者も一族の一員として処遇されることになった⁽³⁾。

このように、関元昌一族の場合、女性にも「房」の構成を認めたことで、一族の構成員は中国の伝統的な家族概念よりも拡大した。これは、リユニオンの活動に、男女の別なくそれぞれの得意分野を活かして参加する基盤がつくられた。また、配偶者にも家族コードを付与したことで、リユニオン活動に家族ぐるみで参加することの動機付けが高まったように思われる。一方、親に連れられてリユニオン活動に参加することも、自身の家族コードを持つことで、一個の独立した主体として扱われ、主体的なかかわりができた。関元昌家族には養子ではないが、家族同様に育った者も含まれており、「家族」が血縁によって閉じられた系ではないことがうかがえる。後述するように、一族でない者も友人としてリユニオンに参加できた。

[アロシマリユニオンと香港リユニオン]

2003年7月31日から8月3日にかけて、第1回目のリユニオンがアメリカのカリフォルニア州パシフィック・グローブにあるアロシマ・カンファレンス・グラウンズにおいて実施された。アロシマユニオンの世話役となったのは北米在住の第6房の構成員であった。房の構成員は2003年の段階で137名を数え、15房のなかでは構成員の多い房であった(容2009:91)。第6房は関元昌の四男・関景賢からはじまる。関景賢は1890年に北洋西医学学校の第1回生として卒業し、水師医院院長や西太后の侍医を歴任した(容2009:90)。中心的な取りまとめ役は、第6房の第4世代の女性であった。彼女は景賢の次男の次女にあたり、一族の長老という印象を筆者は受けた。彼女はアラスカリユニオンにも参加し、一族の歴史を若い世代に語りかけ、リユニオン活動全体を見通す発言

を行った。

アロシマリユニオンには関元昌の子孫227人が一同に会した。この時点で、関元昌の一族は1016人を数え、その22%が集まったことになる。参加者は米国カリフォルニア州から44人、カリフォルニア州以外の米国から26人、カナダから11人、シンガポールから2人、香港から3人、そのほかは中国・オーストラリア・エジプト・エルサルバドル・日本・マレーシア・ニュージーランドからであった。関氏一族は文字通り世界各国から参集したことになる。また、参加者のうちおとなは171人、こどもは56人であった (Yung 2004 : 9-12)。

アロシマリユニオンの成果は、一族の族譜を新たに編纂し、今後もリユニオン活動を継続することが確認されたことである。家族コードが男女の別なく設置されたことから、新しい族譜は伝統的な中国式の族譜と異なり、各世代の娘の「房」も記載されることになった。一族の多くは1949年以後中国大陆を離れ、海外で育った者は中国語を会得していない。第4世代や第5世代は中国系ではない配偶者を選ぶ場合が多くなり、こどもに中国語名をつけていない場合がある。このため、各人の名前は英語と中国語で併記された。

また、アロシマリユニオンでは、リユニオン活動を3年ごとに北米とアジア地域で相互に開催することが確認された。一族は世界に散らばっているが、構成員が集住するのは、北米とアジア地域 (香港・シンガポール・マレーシア・日本) であった。北米で実施すると、自然に北米に居住する一族の構成員の参加が多くなり、アジア地域で実施するとその逆になる。第2回目のリユニオンは香港で開催された (容 2009 : 95)。世話役となったのは香港在住の第7房の構成員であった。房の構成員は2003年の段階で231名を数え、15房のなかでは最多の構成員を誇った (容 2009 : 91)。第7房は関元昌の五男・関景良からはじまる。関景良は香港の名門中学である香港拔萃書院から香港西医書院 (香港大学医学部の前身) に進学した。同級生に孫文がおり、きわめて親しい交友関係にあった (容 2009 : 90)。

アロシマリユニオンが、関元昌一族のリユニオンの枠組みを作ったのに対して、香港リユニオンは家族の歴史に触れる旅程となった。海外で育った一族は、はじめて関元昌夫妻や第2世代の墓を参拝し、一族とかがわりの深い中華合一堂を見学し、広州近くの関氏家祠を訪問した。中華合一堂は、関元昌夫妻が教会活動の拠点とした道済会堂の後身であり、現在なお、香港在住の一族は関係を有しており、1998年に関肇碩が逝去した場合、葬儀が執り行われた。

[アラスカリユニオン]

3回目となるアラスカリユニオンは2009年8月1日から実施された。世話役となったのは北米在住の第2房の構成員であった。房の構成員は2003年の段階で139名で、アロシマリユニオンの世話役となった第6房とはほぼ同規模であった(容2009:91)。第2房は関元昌の長男・関景雲からはじまる。関景雲は南洋水師学堂卒業後、海軍に入り、清仏戦争にも参加したという。その後、海関や漢口招商局に勤務し、商業界に入ったという(容2009:89)。実際の世話役は景雲の長男のこども4人(カリフォルニア在住)が行った。

筆者は、一族の構成員からその計画を2008年の夏には聞かされた。当初はバンクーバーから出発するアラスカまでの船旅として計画されたが、その後、出発地がシアトルに変更され、2008年秋から船の予約が始まった。船旅が選択された理由は、リユニオンに参加する人数の多さゆえであろう。100人以上が一同に会するので、会場場所や食事の場所を確保することに加えて、場所の移動に際しての交通手段の確保を主催者側は考えねばならなかった。その点、船ならば、会議室や食事の確保は陸上で会場を移すよりも容易であった。参加者には定年退職者が少なくなく、バリアフリー設備のいきとどいた船での旅行は、その意味からも配慮のいきとどいた計画であった。(写真1)

アラスカリユニオンには関元昌の子孫115人が、アメリカ(カリフォルニア州中心)からカナダ、日本、香港、ロンドン、ニュージーランドから参集して



写真1：アラスカリユニオン（2009年）が行なわれた船。NCL社のNorwegian Star号、全長は294.8m。



写真2：Kwan Family 特製の「關」Tシャツを身につけた参加者（2009年8月5日スカッグウェイの鉄道の内）

いた。船会社との価格交渉を有利にすすめるため、世話役はリユニオンに一族が友人を誘うことを認めた。実際、筆者を含めて、一族の友人は8人にのぼった。一族ではない者にも、友人である一族の者の家族番号に友人（friend）を意味する「F」を加えた家族コードが割り振られた。アラスカリユニオンは、アロシマリユニオンより参加者が減った。米国カリフォルニア州から49人、カリフォルニア州以外の米国が17人、カナダからは15人、シンガポールからは参加者がなかった。一方で、香港から3人、日本から7人、英国から6人、ニュージーランドから8人、オーストラリアから4人と遠方からの参加者が多かった。参加者のうちこどもは20人ほどであった。（Yung 2004：9-12）。

リユニオンの活動は大きく2つに分かれた。「一族と実際にふれあう」ことと、「一族の歴史を知る」ことであった。家族コードと同様に、こどもを含めた115人がリユニオンの参加者だとわかるような工夫がなされた。参加者には(1)紺のTシャツと(2)白い布製のバッグ、(3)ネームタグ、(4)リユニオンのスケジュールとメンバー表の入ったファイルが渡された。Tシャツとバッグは表に「關」の一文字、裏に「KWAN FAMILY REUNION ALASKA 2009」がデザイン

され、ネームタグにも「關」と「KWAN FAMILY REUNION ALSASKA 2009」が並んで印刷され、これらのアイテムのどれかを身につければリユニオンの参加者だと一目で識別できるようになっていた。(写真2)

乗船前から、一族が相互に知り合う機会がさまざまに設定された。

まず、乗船前の2009年7月31日、シアトル市内の歓迎晩餐会が開かれ、リユニオンにつどうメンバーが一同に会した。この席で、一族の一人が旅行会社を新たに設立し、船会社との価格交渉から部屋割り、シアトルでのホテル予約、レストランの予約までを担当したことがわかった。また、晩餐会には、船旅に参加しない一族も参加し、交流を深めた。

乗船当日の8月1日、改めて、船上歓迎晩餐会が開催された。参加者はリユニオン参加者が115人という数字がどれだけ大きなものかを実感することになった。関一族の予約席だけで、船で一番大きなレストランはほぼ3分の1を占めた。

船は8月1日の午後3時にシアトルを出発し、8月8日の午前7時にシアトルへともどってきた。その間、先住民で有名なケチカン、メダイシャー氷河で有名なジュノー、かつてのアラスカ金鉱鉄道で有名なスカッグウェイ、カナダの港町・プリンスルパートに寄港したが、その間、機会があれば、一族で集まって食事をするよう呼びかけられた。実際、追加料金なしで利用できるビュッフェのコーナーや2つのレストランでは、識別セットのどれかを身につけた一族に必ず出会った。無料のシアターやプールサイドでも家族連れの一族をしばしば見かけた。

各寄港地では、個人の自由は最大限に尊重されたが、ケチカンではタクスマン・ビレッジへの3時間のツアーが、追加料金なしに手配された。また、5日目のスカッグウェイではホワイトパス鉄道ツアーに一族すべてが参加した。列車の2つの車両はほぼ一族が陣取ることになった。見学では、ゆっくり歩く年長者を若者が労わり、小さな子どもたちを年長者は自分の孫のように可愛がっ

カナダへの香港人移民



写真3：途切れた房や一族の秘話を話す長老。手前左から2人目はアロシマリユニオンの世話役。

た。このため、最初は房単位で話をしていたグループが徐々に他のグループとも話をするようになっていった。

この間をぬって、「一族の歴史」が参加者によって共有された。寄港地のなかった2日目は日曜日に当り、まず午前9時に一族が礼拝を行った。その後、ショーラウンジを借り切って、

関元昌一族の各房の紹介を相互に行った。リユニオンに参加したのは、第2房、第6房、第7房、第8房、第9房、第12房の6房にのぼった。第7房の代表が香港、第8房の代表が日本、第9房の代表がロンドン（出生地はシンガポール）からであったのをのぞき、他の房の代表者はすべて北米の者であった。当初、「一族の歴史を語る会」は8月2日の午前中で終了する予定であったが、機材の故障のため、予定どおりに終えることができず、7日目の午前中、残りのセッションを行った。2日目からの活動で、参加者相互がかなり顔見知りになっており、一族の長老格の男性が第2世代でとぎれた房の話や、親戚の秘話を話した（写真3）。このとき、関一族は香港大学のシンボルというべき講堂を寄付したマレーシアの財閥・陸佑と婚姻関係のあることがわかった。各房の代表者はほとんどがパワーポイントでプレゼンテーションを行い、写真をまぜながら、各房の過去と現在を紹介した。各房の紹介の最後に、参加者から、関元昌一族の族譜の更新とリユニオン専用サイトの立ち上げが提案された。

また、より具体的に一族のことを知ってもらうため、リユニオンでは「一族を知ろう！クイズ」が行われた。各人はネームタグの後ろを利用して、自身に

ついて三択問題を書き、そのうち誤まったものをひとつ当てさせ、それに正解するとクーポンを正解者に与え、もらったクーポンの数を競うというものであった。クイズには「わたしはハーバードとイェールとコロンビアと東大で勉強したことがある」「わたしは最近テレビに3回出演した」という一族の高学歴を示すものから、「わたしは生まれたとき、指が6本あった」「わたしの祖母は生まれたとき、指が6本あった」というものまで、さまざまなものがあった。ゲーム感覚で、初対面の一族と話をするきっかけをつくるという企画であった。



写真4：子どもたちのためのセッション。

このほか、自身が出演したテレビ番組やバレエのパフォーマンスなどを披露する時間が設けられた。

活動は当初、寄港予定のない8月2日と8月7日中心に設定されていたが、8月2日の各房の発表が機器の不具合で中断されたこともあり、途中から予定が増えていった。8月4日、寄港地ジュノーを出発後、水彩画教室とビーズアクセサリー教室が開かれた(写真4)。8月6日には子どもたちが主人公の宝物さがしゲームが行われ、子どもたち同士での交流が企画された。また、8月4日の夕食は第4世代と第5世代以下で分かれて行われ、新しい世代同士が一族としての交流を深めるような場が設定された。

こうして、8月5日のスカッグウェイで、全員が2つのコーチに乗り込んだ際に、かなりの程度で参加者ほぼ全員が全員の名前をわかるようになっていた。8月7日の船上での最後の夜には、「一族を知ろう!クイズ」の優勝者がおとなと子ども双方で発表され、「一族の最長老」「一族でもっとも若い者」

「一族で家族の研究をしている者」が表彰された。また、関元昌一族の族譜の更新とリユニオン専用サイトの立ち上げが一族の総意として改めて確認され、今回のリユニオンはアジア地区で行われることが提案された。

[言語と I T リテラシー]

こうしたリユニオン活動が円滑に進んだ最大の基盤は、北米在住でない一族にもすべて英語で連絡がとれたことによる。一族の共通言語は広東語でも中国語標準語でもなく、英語である。自身が移民の第 1 世代でもこどもの時にアメリカに移民した場合には、本来の母語である広東語があまり上手でない者もいる。また、アメリカで育ったことから、配偶者には必ずしも中国系を選択していない。配偶者にはアジア系の日系四世のほかに、白人や黒人などの非アジア系が見られる。すべての連絡を英語でとることによって、出身地・血統に関係なく、一律に関元昌一族であるという意識を持たせることに成功するという副産物があったように思われる。

関元昌が清末の西洋的歯科医の先駆けであったことから、第 2 世代には医者が多かった。それが「一族の伝統」となり、現在なお、一族には医師や工学関係者が多く、I T リテラシーは高い。今回のリユニオンに向けて一族のウェブサイトを作りあげ、族譜の更新が始まった。遠隔地に分散して住みながらも、ウェブサイトを通じて関元昌一族は一族の情報を共有することができる。こうした言語能力と I T リテラシーの高さは、今後のリユニオン活動を円滑に進める重要なインフラであろう。

おわりに

香港から北米への移民の香港から動態を見ると、1920年代に始まった中国人移民排斥法は戦後まで影響を持っていた。アメリカ・カナダともに中国系が他

の民族と同様に、人種の区別なしに移民できるようになるには、1960年代半ば以降を待たねばならなかった。戦後、中国からの移民は1980年代までほぼ皆無であったので、中国系移民の主な供給源は香港と台湾であった。カナダについて言えば、香港からの移民の持った存在感は大きく、中国語メディアの発展状況に端的にあらわれている。

しかし、返還後、香港人移民が減少し、中国大陸からの移民が急増した。海外華人社会の人口構成の変化は、中国語メディアの動向にあらわれている。また、バンクーバーA氏の生活の変化にもあらわれているように思われる。

その一方、関元昌一族のリユニオンは、国家の前に家族が存在するというメッセージを強く発信している。関元昌一族のリユニオン活動は、一族の親睦が強調され、「中国」との遭遇は謳われていない。しかし、1000人にも及ぶ一族のなかには、北米に居住しながら、まったくリユニオンに関心を示さない人々もいる。異なる民族を配偶者に持ちながらも、関元昌一族としての活動に参加することの根底には、家族への愛着と同時に家族の出自である中国世界へのつよい関心があるように思われる。そのように考えると、リユニオンの活動も、中国大陸からの移民の急増という新たな変化に対して自身のアイデンティティを確認しようとするものと解釈できる。

北米に定住した人々が、再度自分たちに文化的に近いと思われるグループの大規模な新規流入に対して、さまざまな形で対応を見せているのが現在の状況ではないだろうか。

- 1 1998年9月24日に訪問
- 2 2009年8月7日、「一族の歴史を語る会」の後で容應黄氏より聞き取り。
- 3 「配偶者」の範疇には、法律的に婚姻関係を結んだ場合だけでなく、事実婚の場合にも「S」を付与した家族コードが付与された (Yung 2004 : 11)。

参考文献（著者名の五十音順）

ウォン, パーナード・P (WONG, Bernard P.) 1997「サンフランシスコの香港中国人移民」ロナルド・スケルドン編／可児弘明・森川眞規夫・吉原和男監訳『香港を離れて：香港中国人移民の世界』行路社, 359-388ページ（原著は *Hong Kong Immigrants in San Francisco*, in SKELDON, Ronald ed., *Reluctant Exiles?: Migration from Hong Kong and the New Overseas Chinese*, New York, M, E, Sharpe, 1994, pp. 235 - 255）。

伍仲榮 1998「加拿大」潘翎『海外華人百科全書』香港：三聯書店, 234-247ページ。
斯波義信 1996『華僑』岩波新書。

ジョンソン, グレアム (JOHNSON, Graham), ラリー, ダイアナ (LARY, Diana) 1997「香港からカナダへの移民——その背景」ロナルド・スケルドン編／可児弘明・森川眞規夫・吉原和男監訳『香港を離れて：香港中国人移民の世界』行路社, 131-145ページ（原著は *Hong Kong Migration to Canada: The Background*, in SKELDON, Ronald ed., *Reluctant Exiles?: Migration from Hong Kong and the New Overseas Chinese*, New York, M, E, Sharpe, 1994, pp. 87-97）。

スマート, ジョセフィン (SMART, Josephine) 1997「カナダへのビジネス移民——欺瞞と搾取」ロナルド・スケルドン編／可児弘明・森川眞規夫・吉原和男監訳『香港を離れて：香港中国人移民の世界』行路社, 147-203ページ（原著は *Business Immigration to Canada: Deception and Exploitation*, in SKELDON, Ronald ed., *Reluctant Exiles?: Migration from Hong Kong and the New Overseas Chinese*, New York, M, E, Sharpe, 1994, pp. 98-119）。

陳毓祥・梁家永『脈搏人物統篇』, 香港：博益出版社, 1986年。

森川眞規雄 2003「逍遙する味覚——香港広東料理の「美味」をめぐる」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造——アジア太平洋の底流』弘文堂, 190-209ページ。

容應萸 2009「あるディアスポラ家族の物語」『東亜』, No.504 (2009年6月号), 86-96ページ。

YUNG, Ying-yue 2004 *The Dispersion of a Chinese Diaspora Family: The case of the Kwan Family in America*, 亜細亜大学アジア経済研究所, アジア研究シリーズNo.51 『21世紀の中国系人（華僑・華人）』, 7-53ページ。

到加拿大的香港人移民

谷 垣 真理子

1997 年问题出现以后，香港有不少人移民海外。加拿大就是其中之一移民目的地。为了调查香港移民情况，笔者访问过多伦多（1998 年，1999 年）和温哥华（1998 年，1999 年，2009 年）。2009 年笔者参加了关元昌家族宗亲会活动。本稿首先整理从香港移民至北美的历史，以考察二战后香港移民如何巩固移民加拿大后的生活。本稿亦整理了笔者在加拿大的采访调查。笔者还讨论了 1980 年代以前移民加国的‘老香港’与 1980 年代以后移民加国的‘新香港’，特别是 1997 年以后加拿大香港移民的变化情况。既往的研究往往关注因香港回归问题所引发的香港移民的特殊性。但本文也将揭示，在加拿大香港移民中，恰恰是 1960 年代以移民的‘老香港’所建构的文化社会安全网而令‘新香港’的安顿创造了条件。‘香港人’一词是二战后新出现的用语，其本身也是冷战的产物，因为冷战结构延续至中国，香港中断了与中国内地的交流，与香港工业化过程同时出现的，是香港社会的统合进程。